

症例は、44才、男性。某施設に入所中、吐血にて当院外来受診、GIFにて食道静脈瘤、胃潰瘍(A2×2)確認、併行して行われた腹部エコーにて、肝S5-6にφ70mm大のhyperechoic tumor並びに同部位に近接し、φ15mm大のhypoechoic lesionを認めた。

血液検査にては、PIVKA-II 5000mAU/ml以上、AFP 23ng/ml、AFP-L3は陰性、軽度のトランスアミナーゼの上昇を認めた。本例は、main tumorと肝内多発性娘結節(IM)が存在し、かつ主病変の近傍に異時多発型と判断される高分化型病変を合併した興味あるCaseと思慮された。MRI、CT、腹部血管造影、病理組織所見にて、各々のcharacterizationを呈示したい。

### 13 SMANCS-TACE後の再発巣の画像診断に苦慮した肝細胞癌の1例

和栗 暢生・渡辺 和彦・池田 晴夫  
岩本 靖彦・相場 恒男・米山 靖  
古川 浩一・五十嵐健太郎・月岡 恵  
大谷 哲也\*・斉藤 英樹\*  
橋立 英樹\*\*

新潟市民病院消化器科  
同 外科\*  
同 病理検査科\*\*

症例は45歳、男性。B型慢性肝炎を背景に、2002年7月、S7に28mm大の肝細胞癌(以下HCC)に対してSMANCS-TACEが施行された。治療2ヵ月後、右葉後区域に虚血性胆管炎を併発し、bilomaを多数残した。その後2004年5月、S7に再発を疑われて再入院。US、angio-CTでは周囲にbilomaが器質化した充実性腫瘤が多発していたため、HCCとしてviableな部分を特定できなかった。後区域切除を行ったところ、治療部周囲にわずかなviable HCCを認めた。

当科で2000年5月から2004年4月までにSMANCS-TACEが施行された64例(のべ97回)で血管や胆管合併症を調査した。胆管炎は8例(12.5%)、9回(9.3%)、bilomaは本症例1例のみ(1.6%)であった。2回以上血管造影施行の

41例中、動脈狭小化が見られた症例は26例(63.4%)であった。本治療による合併症はその治療効果と併せて詳細に検討されるべきと思われる。

### 14 シスプラチンの反復動注化学療法が著効した門脈腫瘍栓合併びまん型肝細胞癌の1例

加藤 卓・坪井 康紀・山内 芳樹  
横山 恒・山田 聡志・柳 雅彦  
三浦 努・高橋 達

長岡赤十字病院消化器科

症例は56歳、男性。約10年前にC型慢性肝炎と診断されIFN療法を受けたが改善が認められず、以後通院していなかった。2004年6月に食欲不振が出現し近医受診。腹部CTにて肝腫瘍が疑われ、7月当科紹介初診。精査にて門脈腫瘍栓を伴うびまん型のStage IVAの肝細胞癌と診断され当科入院。入院後より黄疸の増悪と腹水の貯留が認められるようになった。初回治療としてリザーバー埋め込みによるシスプラチン動注化学療法を施行したところ、腫瘍と門脈腫瘍栓の縮小、肝不全の改善を認め、腫瘍マーカーもPIVKA IIが5480mAU/mlから39mAU/mlへと著減した。以後シスプラチン動注化学療法を12月まで3回施行したが、この間腫瘍の増大や肝不全の進行は認めず、PIVKA IIの増加も認めなかった。門脈腫瘍栓を伴うびまん型進行肝細胞癌にシスプラチン動注化学療法が有効な症例であった。

### 15 長期に持続腰椎麻酔によるペインコントロールを続けているHCC骨転移の1例

森 茂紀・東海林俊之・菅原 聡  
柳澤 善計・小林 隆\*・諸田 哲也\*  
佐藤 攻\*

信楽園病院内科  
同 外科\*

症例はHBVキャリアーの59歳、男性。H11.1.25、HCCにて肝左葉外側区域切除術を施行。H12.5.12、左腸骨転移にて左腸骨部分切除術施行。同